

ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記

宮沢賢治

青空文庫



一、ペンネンネンネン・ネネムの独立

「冒頭原稿数枚焼失」のでした。実際、東のそらは、お「キレ」さまの出る前に、琥珀こはく色のビールで一杯いっぱいになるのでした。ところが、そのまま夏になりましたが、ばけものたちはみんな騒さわぎはじめました。

そのわけ「七字不明」ばけもの麦も一向みのらず、大「六字不明」が咲いただけで一つぶも実になりませんでした。秋になっても全くその通「七字不明」栗くりの木さえ、ただ青いいがばかり、「八字不明」飢饉ききんになつてしまいました。

その年は暮れましたが、次の春になりますと飢饉はもうとてもひどくなつてしまいました。

ネネムのお父さん、森の中の青ばけものは、ある日頭をかかえていつまでもいつまでも考えていましたが、急に起きあがつて、

「おれは森へ行つて何かさがして来るぞ。」と云いいながら、よろよろ家を出て行きました。が、それなりもういつまで待つても帰つて来ませんでした。たしかにばけもの世界の天国

に、行つてしまつたのでした。

ネネムのお母さんは、毎日目を光らせて、ため息ばかり吐いていましたが、ある日ネネムとマミミとに、

「わたしは野原に行つて何かさがして来るからね。」と云つて、よろよろ家を出て行きましたが、やはりそれきりいつまで待つても帰つて参りませんでした。たしかにお母さんもその天国に呼ばれて行つてしまつたのでした。

ネネムは小さなマミミとただ二人、寒さと飢えとにガタガタふるえて居りました。するとある日戸口から、

「いや、今日は。私はこの地方の飢饉を救<sup>たす</sup>げに来たものですがね、さあ何でも喰<sup>た</sup>べなさい。」と云いながら、一人の目の鋭<sup>す</sup>いせい<sup>と</sup>の高い男が、大きな籠<sup>かご</sup>の中に、ワップルや葡萄<sup>ぶどう</sup>。パンや、そのほかうまいものを沢<sup>たく</sup>山<sup>さん</sup>入れて入つて来たのでした。

二人はまるで籠を引つたくるようにして、ムシヤムシヤムシヤムシヤ、沢山喰べてから、  
やつと、

「おじさんありがとう。ほんとうにありがとうよ。」なんて云つたのでした。

男は大へん目を光らせて、二人のたべる処<sup>ところ</sup>をじつと見て居りましたがその時やつと口を

開きました。

「お前たちはいい子供だね。しかしいい子供だというだけでは何にもならん。わしと一緒よにおいで。いいところ連れてってやろう。尤もつとも男の子は強いし、それにどうも膝ひざやかかとの骨が固まってしまっているようだから仕方ないが、おい、女の子。おじさんとこへ来ないか。一日いっぱい葡萄パンを喰べさしてやるよ。」

ネネムもマミミも何とも返事をしませんでした。男はふいつとマミミをお菓子かしの籠の中へ入れて、

「おお、ホイホイ、おお、ホイホイ。」と云いながら俄にわかにあわてだして風のように家を出て行きました。

何のことだかわけがわからずきよろきよろしていたマミミ「一字不明」、戸口を出てからはじめてわつと泣き出しネネムは、

「どろぼう、どろぼう。」と泣きながら叫さけんで追いかけてきましたがもう男は森を抜ぬけてずうつと向うの黄色な野原を走って行くのがちらつと見えるだけでした。マミミの声が小さな白い三角の光になってネネムの胸にしみ込こむばかりでした。

ネネムは泣いてどなって森の中をうろうろうろはせ歩きましたがとうとう疲つかれてば

たつと倒れてしまいました。

それから何日経ったかわかりません。

ネネムはふつと目をあきました。見るとすぐ頭の上のばけもの栗の木がふっふつと湯気を吐いていました。

その幹に鉄のはしごが両方から二つかかかって二人の男が登って何かしきりにつなをたぐるような網を投げるようなかたちをやつて居りました。

ネネムは起きあがつて見ますとお「キレ」さまはすっかりふだんの様になっておまけにテカテカして何でも今朝あたり顔をきれいに剃つたらしいのです。

それにかれ草がほかほかしてばけものわらびなどもふらふらと生え出しています。ネネムは飛んで行つてそれをむしやむしやたべました。するとネネムの頭の上でいやに平べつたい声がありました。

「おい。子供。やつと目がさめたな。まだお前は飢饉のつもりかい。もうじき夏になるよ。すこしおれに手伝わないか。」

見るとそれは実に立派なばけもの紳士でした。貝殻でこしらえた外套を着て水煙草を片手に持つて立っているのです。

「おじさん。もう飢饉は過ぎたの。手伝いつて何を手伝うの。」

「昆布こんぶ取りさ。」

「ここで昆布がとれるの。」

「取れるとも。見ろ。折角やつてるじゃないか。」

なるほどさっきの二人は一生けん命網をなげたりそれを繰くったりしているようでしたが網も糸も一向見えませんでした。

「あれでも昆布がとれるの。」

「あれでも昆布がとれるのかつて。いやな子供だな。おい、縁起えんぎでもないぞ。取れもしないところはどうして工場なんか建てるんだ。取れるともさ。現におれはじめ沢山のものがそれでくらしを立てているんじゃないか。」

ネネムはかすれた声でやつと

「そうですか。おじさん。」と云いました。

「それにこの森はすっかりおれの森なんだからさっきのように勝手にわらびなんぞ取ることは疾とうに差し止めてあるんだぞ。」

ネネムは大変いやな気がしました。紳士は又云いました。

「お前もおれの仕事に手伝え。一日一ドルずつ手間をやるぜ。そうでもしなかつたらお前は飯を食えまいぜ。」

ネネムは泣き出しそうになりましたがやつとこらえて云いました。

「おじさん。そんなら僕手伝うよ。けれどもどうして昆布を取るの。」

「ふん。そいつは勿論もちろん教えてやる。いいか、そら。」紳士はポケットから小さくたた畳んだこうもりがき洋傘の骨のようなものを出しました。

「いいか。こいつを延ばすと子供の使うはしごになるんだ。いいか。そら。」

紳士はだんだんそれを引き延ばしました。間もなく長さメートル十米ばかりの細い細い絹糸でこさえたようなはしごが出来あがりました。

「いいかい。こいつをね。あの栗の木に掛けるんだよ。ああ云うぐあい工合にね。」紳士はさっきの二人の男を指さしました。二人は相かわらず見えないう網や糸をまっさおな空に投げたり引いたりしています。

紳士ははしごを栗の樹きにかけました。

「いいかい。今度はおまえがこいつをのぼって行くんだよ。そら、登ってごらん。」

ネネムは仕方なくはしごにとりついて登って行きましたがはしごの段々がまるで針金の



ように細くて手や、足に喰い込んでちぎれてしまいそうでした。

「もつと登るんだよ。もつと。もつと。そら、もつと。」下では紳士が叫んでいます。ネネムはすつかり頂上まで登りました。栗の木の頂上というものはどうも実に寒いのでした。それに気がついて見ると自分の手からまるで蜘蛛くもの糸でこしらえたようなあやしい網がぐらぐらゆれながらずうつと青空の方へひろがっているのです。そのぐらぐらはだんだん烈はげしくなつてネネムは危なく下に落ちそうにさえなりました。

「そら、網があつたらう。そいつを空へ投げるんだよ。手がぐらぐら云うだろう。そいつはね、風の中のふかやさめがつきあたってるんだ。おや、お前はふるえてるね。意気地なしだなあ。投げるんだよ、投げるんだよ。そら、投げるんだよ。」

ネネムは何とも云えず厭いやな心持がしました。けれども仕方なく力いっばい一杯いっぱいにそれをたぐり寄せてそれからあらんかぎり上の方に投げつけました。すると目がぐるぐるつとして、ご機嫌きげんのいいおキレさままでがまるで黒い土の球たまのように見えそれからシユウとはしごのてっぺんから下へ落ちました。もう死んだとネネムは思いましたがその次にもう耳が抜けたとネネムは思いました。というわけはネネムはきちんと地面の上に立っていて紳士がネネムの耳をつかんでぶりぶり云いながら立っていました。

「お前もいくじのないやつだ。何というふにやふにやだ。俺おれが今お前の耳をつかんで止めてやらなかったらお前は今ごろは頭がパチンとはじけていたろう。おれはお前の大恩人ということになっている。これから失礼をしてはならん。ところでさあ、登れ。登るんだよ。夕方になつたらたべものも送つてやろう。夜になつたら綿のはいったチョッキもやろう。さあ、登れ。」

「夕方になつたら下へ降りて来るんでしよう。」

「いいや。そんなことがあるもんか。とにかく昆布がとれなくちやだめだ。どれちよつと一寸網を見せろ。」

紳士はネネムの手にくつついた網をたぐり寄せて中をあらためました。網のずうつとはじの方に一寸四方ばかりの茶色なヌラヌラしたものがついていました。紳士はそれを取つて

「ふん、たったこれだけか。」と云いながらそれでも少し笑ったようでした。そしてネネムは又はしごを上つて行きました。

やつと頂上へ着いて又力一杯空に網を投げました。それからわくわくする足をふみしめふみしめ網を引き寄せて見ましたが中にはなんにもはいつていませんでした。

「それ、しっかり投げろ。なまけるな。」下では紳士が叫んでいます。ネネムはそこで又投げました。やっぱりなんにもありません。又投げました。やっぱり昆布はいりません。つかれてヘトヘトになったネネムはもう何でも構わないから下りて行こうとしました。すると愕おどろいたことにははしごがありませんでした。

そしてもう夕方になったと見えてばけものぞらは緑色になり変なばけものパンが下の方からふらふらのぼつて来てネネムの前にとまりました。紳士はどこへ行ったか影かげもかたちもありません。

向うの木の上の二人もしょんぼりと頭を垂れてパンを食べながら考えているようすでした。その木にも鉄のはしごがもう見えませんでした。

ネネムも仕方なくばけものパンを嚙かじりはじめました。

その時紳士が来て、

「さあ、たべてしまつたらみんな早く網を投げろ。昆布を一斤きんとらないうちは綿のはいつたチヨツキをやらんぞ。」とどなりました。

ネネムは叫びました。

「おじさん。僕もうだめだよ。おろしてお呉くれ。」

紳士が下でどなりました。

「何だと。パンだけ食ってしまつてあとはおろしてお呉れだと。あんまり勝手なことを云うな。」

「だつてもううごけないんだもの。」

「そうか。それじゃ動けるまでやすむさ。」と紳士が云いました。ネネムは栗の木のてっぺんに腰こしをかけてつくづくとやすみました。

その時栗の木が湯気をホツホツと吹き出ふしましたのでネネムは少し暖まつて楽になつたように思いました。そこで又元氣を出して網を空に投げました。空では丁度星が青く光りはじめたところでした。

ところが今度の網がどうも実に重いのです。ネネムはよろこんでたぐり寄せて見ますとたしかに大きな大きな昆布が一枚ひらりとはいつて居りました。

ネネムはよろこんで

「おじさん。さあ投げるよ。とれたよ。」

と云いながらそれを下へ落しました。

「うまい、うまい。よし。さあ綿のチヨツキをやるぜ。」

チヨツキがふらふらのぼつて来ました。ネネムは急いでそれを着て云いました。

「おじさん。一ドル呉れるの。」

紳士が下の浅黄色のもやの中で云いました。

「うん。一ドルやる。しかしパンが一日一ドルだからな。一日十斤以上こんぶを取ったらあとは一斤十セントで買ってやろう。そのよけいの分がおまえのもうけき。ためて置いていつでも払<sup>はら</sup>つてやるよ。その代り十斤に足りなかつたら足りない分がお前の損き。その分かしにして置くよ。」

ネネムは実にながかりしました。向うの木の二人の男はもういくら星あかりにすかして見ても居ないようでした。きつとあんまり仕事がつらくて消滅<sup>しょうめつ</sup>してしまつたのでしよう。さてネネムは決心しました。それからよるもひるも栗の木の湯気とばけものパンと見えない網と紳士と昆布と、これだけを相手にして実に十年というものこの仕事をつづけました。これらの対<sup>あいて</sup>手の中でもパンと昆布とがまず大将でした。はじめの四年は毎日毎日借りばかり次の五年でそれを払いおしまいのお金がたまりました。そこで下に降りてたまつた三百ドルをふところにしてばけもの世界のまちの方へ歩き出しました。

## 二、ペンネンネンネンネン・ネネムの立身

ペンネンネンネンネン・ネネムは十年のあいだ木の上に直立し続けた<sup>ため</sup>にしきりに痛む膝<sup>ひざ</sup>を撫<sup>な</sup>でながら、森を出て参りました。森の出口に小さな雑貨商がありましたので、ネネムは店にはいつて、まっ黒な上着とズボンを一つ買いました。それから急いでそれを着ながら考えました。

「何か学問をして書記になりたいもんだな。もう投げるようなたぐるようなことは考えただけでも命が縮まる。よききつと書記になるぞ。」

ペンネンネンネンネン・ネネムはお<sup>あし</sup>銭を払って店を出る時ちらつと向うの姿見にうつつた自分の姿を見ました。

着物が夜のようにまっ黒、縮れた赤毛が頭から肩<sup>かた</sup>にふさふさ垂れまっ青な眼<sup>め</sup>はかがやきそれが自分だかと疑った位立派でした。

ネネムは嬉<sup>うれ</sup>しくて口<sup>くちぶえ</sup>笛を吹いてただ一息に三十ノツトばかり走りました。

「ハンムンムンムン・ムムネの市まで、もうどれ位ありましようか。」とペンネンネンネン・ネネムが、向うからふらふらやって来た黄色な影法師のばけ物にたずねまし

た。

「そうだね。一寸ここまでおいで。」その黄色な幽霊ゆうれいは、ネネムの四角な袖そでのはじをつまんで、一本のばけものりんごの木の下まで連れて行って、自分の片足をりんごの木の根にそろえて置いて云いました。

「あなたも片足をここまで出しなさい。」

ネネムは急いでその通りしますとその黄色な幽霊は、屈かがんで片っ方の目をつぶって、足さきがりんごの木の根とよくそろっているか検査したあとで云いました。

「いいか。ハンムンムンムン・ムムネ市の入口までは、丁度この足さきから六ノット六チエーンあるよ。それでは途とちゆう中気をつけておいで。」そしてくるつとまわって向うへ行つてしまいました。

ネネムはそのうしろから、ていねいにお辞儀をして、

「ああありがとうございます。六ノット六チエーンならば、私が一時間一ノット一チエーンずつあるきますと六時間で参れます。一時間三ノット三チエーンずつあるきますと二時間で参れます。すっかり見当が付きまして、こんなうれしいことはありません。」と云いながら、もう一つ頭を下げました。赤毛はじやらんと下に垂さがりましたけれども、実は黄

色の幽霊はもうずうつと向うのばけもの世界のかげろうの立つ畑の中にでもはいったらしく、影もかたちもありませんでした。

そこでネネムは又あるき出しました。すると又向うから無暗むやみにきらきら光る鼠色ねずみの男が、赤いゴム靴ぐつをはいてやって参りました。そしてネネムをじろじろ見ていましたが、突然とつぜんそばに走って来て、ネネムの右の手首をしっかりとつかんで云いました。

「おい。お前は森の中の昆布採りこんぶがいやになってこつちへ出て来た様子だが、一体これから何が目的だ。」

ネネムはこれはきつと探偵たんでいにちがいないと思いましたが、堅かたくなって答えました。「はい。私は書記が目的であります。」

するとその男は左手で短いひげをひねって一寸考えてから云いました。

「ははあ、書記が目的か。して見ると何だな。お前は森の中であんまりばけものパンばかり喰くったな。」

ネネムはすっかり凶星ずぼしをさされて、面くらって左手で頭を搔かきました。

「はい実は少少たべすぎたかと存じます。」

「そうだろう。きつとそうにちがいない。よろしい。お前の身分や考えはよく諒解りようかいし



た。行きなさい。わしはムムネ市の刑事だ。」

ネネムはそこでやつと安心してていねいにおじぎをして又町の方へ行きました。

丁度一時間と六分かかって、三ノツト三チエーンを歩いたとき、ネネムは一人の百姓のおかみさんばけものと会いました。その人は遠くからいかにも不思議そうな顔をして来ましたが、とうとう泣き出してかけ寄りました。

「まあ、クエクや。よく帰っておいでだね。まあ、お前はわたしを忘れてしまったのかい。ああなさけない。」

ネネムは少し面くらいましたが、ははあ、これはきつと人ちがいだと気がつきましたので急いで云いました。

「いいえ、おかみさん。私はクエクという人ではありません。私はペンネンネンネン・ネネムというのです。」

するとそのだいたい橙色の女のばけものはやつと気がついたと見えて俄にわかに泣き顔をやめて云いました。

「これはどうもとんだ失礼をいたしました。あなたのおなりがあんまりせがれそっくりなもんですから。」

「いいえ。どうぞ致しまして。私は今度はじめてムムネの市に出る処です。」

「まあ、そうでしたか。うちのせがれも丁度あなたと同じ年ころでした。まあ、お髪の毛のちぢれ工合から、お耳のキラキラする工合、何から何までそっくりです。それにまあ、なめくじばけもののような柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをはいて、なにが御志願でいらしやるのやら。おお、うちのせがれもこんなわらじでどこを今ごろ、ポオ、ポオ、ポオ、ポオ。」とそのおかみさんばけものは泣き出しました。ネネムは困って、

「ね、おかみさん。あなたのむすこさんは、もうきつとどこかの書記になつてるんですよ。きつとじきお迎いをよこすにちがいません。そんなにお泣きなさらなくてもいいでしょう。私は急ぎますからこれで失礼いたします。」と云いながらクラリオネットのようなすすり泣きの声をあとに、急いでそこを立ち去りました。

さてそれから十五分でネネムはムムネの市までもう三チエーンの所まで来ました。ネネムはそこで髪をすっきり直して、それから路ばたの水銀の流れで顔を洗い、市にはいつて行く支度をしました。

それからなるべく心を落ちつけてだんだん市に近づきますと、さすがはばけもの世界の首府のけはいは、早くもネネムに感じました。

ノンノンノンノンノンというなりは地の〔以下原稿数枚分焼失〕

「今授業中だよ。やかましいやつだ。用があるならはいって来い。」とどなりましたので、学校の建物はぐらぐらしました。

ネネムはそこで思い切つて、なるべく足音を立てないように二階にあがつてその教室にはいりました。教室の広いことはまるで野原です。さまざまの形、とうがらしや、<sup>うす</sup>白や、<sup>はざみ</sup>鉞や、赤や白や、実にさまざまの学生のばけものがぎっしりです。向うには大きな崖のく<sup>がけ</sup>らいある黒板がつるしてあつて、せの高さ百尺あまりのさっきの先生のばけものが、講義をやつて居りました。

「それでその、もしも塩素が赤い色のものならば、これは最も明らかな不合理である。黄色でなくてはならん。して見ると黄色という事はずいぶん大切なもんだ。黄という字はこう書くのだ。」

先生は黒板を向いて、両手や鼻や口や<sup>ひじ</sup>肱やカラアや髪<sup>ひげ</sup>の毛やなにかで一ぺんに三百ばかり黄という字を書きました。生徒はみんな大急ぎで筆記帳に黄という字を一<sup>いっばい</sup>杯書きました。だがとても先生のようにうまくは出来ません。

ネネムはそつと一番うしろの席に座<sup>すわ</sup>つて、隣<sup>とな</sup>りの赤と白のまだらのばけもの学生に低くたずねました。

「ね、この先生は何て云うんですか。」

「お前知らなかつたのかい。フウファイーボー博士き。化学の。」とその赤いばけものは馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>にしたように目を光らせて答えました。

「あつ、そうでしたか。この先生ですか。名高い人なんですね。」とネネムはそつとつづやきながら自分もふところから鉛<sup>えんぴつ</sup>筆と手帳を出して筆記をはじめました。

その時教室にパツと電<sup>でんとう</sup>燈がつきました。もう夕方だったので。博士が向うで叫<sup>こゝろ</sup>んでいます。

「しからば何<sup>ゆえ</sup>が故に夕方緑色が判然とするか。けだしこれはプウルウキインイイの現象によるのである。プウルウキインイイとはこう書く。」

博士はみみずのような横文字を一ぺんに三百ばかり書きました。ネネムも一生けん命書きました。それから博士は俄かに手を大きくひろげて

「げにも、かの天にありて濛<sup>もうもう</sup>々たる星雲、地にありてはあいまいたるばけ物律、これはこれ宇宙を支配す。」と云いながらテーブルの上に飛びあがって腕<sup>うで</sup>を組み堅く口を結んで

きつとあたりを見まわしました。

学生どもはみんな興奮して

「ブラボオ。フウファイボー先生。ブラボオ。」と叫んでそれからバタバタ、ノートを閉じました。ネネムもすっかり釣り込まれて、

「ブラボオ。」と叫んで堅く堅く決心したように口を結びました。この時先生はやつとほんのすこし笑つて一段声を低くして云いました。

「みなさん。これからすぐ卒業試験にかかります。一人ずつ私の前をお通りなさい。」と云いました。

学生どもは、そこで一人ずつ順々に、先生の前を通りながらノートを開いて見せました。先生はそれを一寸見てそれから一言か二言質問をして、それから白墨でせなかに「及」とか「落」とか「同情及」とか「退校」とか書くのでした。

書かれる間学生はいかにもくすぐったそうに首をちぢめているのでした。書かれた学生は、いかにも気がかりらしく、そつと肩をすぼめて廊下まで出て、友達に読んで貰つて、よろこんだり泣いたりするのでした。ぐんぐんぐんぐん、試験がすんで、いよいよネネム一人になりました。ネネムがノートを出した時、フウファイボー博士は大きなあくびをや

りましたので、ノートはスポリと先生に吸い込まれてしまいました。先生はそれを別段気にかけるでもないらしく、コクツと呑んでしまつて云いました。

「よろしい。ノートは大へんによく出来ている。そんなら問題を答えなさい。煙突から出るけむりには何種類あるか。」

「四種類あります。もしその種類を申しますならば、黒、白、青、無色です。」

「うん。無色の煙に気がついた所は、実にどうも偉い。そんなら形はどうであるか。」

「風のない時はたての棒、風の強い時は横の棒、その他はみみずなどの形。あまり煙の少ない時はコルク抜きぬきのようにもなります。」

「よろしい。お前は今日の試験では一等だ。何か望みがあるなら云いなさい。」

「書記になりたいのです。」

「そうか。よろしい。わしの名刺めいしに向うの番地を書いてやるから、そこへすぐ今夜行きなさい。」

ネネムは名刺を呉れるかと思つて待つていますと、博士はいきなり白墨をとり直してネネムの胸に、「セム二十二号。」と書きました。

ネネムはよろこんで丁寧ていねいにおじぎをして先生の処ところから一足退きますと先生が低く、

「もう藁わらのオムレツが出来あがった頃ころだな。」と眩つぶやいてテーブルの上にあつた革かわのカバンに白墨びやくのかけらや講義げんこうの原稿げんこうやらを、みんな一いっしょ緒しょに投げ込んで、小脇こわきにかかえ、さつき顔を出した窓からホイツと向うの向うの黒い家をめがけて飛び出しました。そしてネムはまちをこめた黄色ゆうぐれの夕暮ゆぐれの中の物干台にフウファイバー博士が無事に到とうちやく着やくして家の中に入って行くのをたしかに見ました。

そこでネムは教室を出てはしご段を降りますと、そこには学生が実に沢山泣いていました。全く三千六百五十三回、則ち閏年すなわうるうも入れて十年という間、日曜も夏休みもなしに落第らくだいばかりしては、これが泣かないでいられますようか。けれどもネムは全くそれとは違ちがいます。

元氣よく大学校の門を出て、自分の胸の番地を指さして通りかかったくらげのようなばけものに、どう行つたらいいかをたずねました。

するとそのばけものは、ひどく町寧ちやうねいにおじぎをして、

「ええ。それは世界裁判長のお邸やしきでございます。ここから二チエーンほどおいでになりますと、大きな粘土ねんどでかためた家がございます。すぐおわかりでございましょう。どうか私もよろしくお引き立てをねがいます。」と云つて又町寧またにおじぎをしました。

ネネムはそこで一時間一ノット一チェーンの速さで、そちらへ進んで参りました。たちまち道の右側に、その粘土作りの大きな家がしゃんと立って、世界裁判長官邸かんでいと看板がかかって居りました。

「ご免なさい。ご免なさい。」とネネムは赤い髪を掻かきながら云いました。

すると家の中からペタペタペタ沢山の沢山のばけものどもが出て参りました。

みんなまつ黒な長い服を着て、恭うやうや々しく礼をいたしました。

「私は大学のフウフィーボー先生のご紹しょうかい介で参りましたが世界裁判長に一寸お目にかかれましようか。」

するとみんなは口をそろえて云いました。

「それはあなたでございます。あなたがその裁判長でございます。」

「なるほど、そうですか。するとあなた方は何ですか。」

「私もはあなたの部下です。判事や検事やなんかです。」

「そうですか。それでは私はこの主人ですね。」

「さようでございます。」

こんなような訳でペンネンネンネンネン・ネネムは一ぺんに世界裁判長になって、みんな



なに囲まれて裁判長室の海綿でこしらえた椅子いすにどっかりと座りました。

すると一人の判事が恭々しく申しました。

「今晚開廷の運びになつてゐる件が二つございますが、いかがでございますでしょうか、いかがお疲れでいらつしやいませうか。」

「いいや、よろしい。やります。しかし裁判の方針はどうですか。」

「はい。裁判の方針はこちらの世界の人民が向うの世界になるべく顔を出さぬように致したいのでございます。」

「わかりました。それではすぐやります。」

ネネムはまつ白なちぢれ毛のかつらを被かぶつて黒い長い服を着て裁判室に出て行きました。部下がもう三十人ばかり席についています。

ネネムは正面の一番高い処に座りました。向うの隅すみの小さな戸口から、ばけものの番兵に引っぱられて出て来たのはせいの高めい眼めの鋭とどい灰色のやつで、片手にほうきを持つて居りました。一人の検事が声高く書類を読み上げました。

「ザシキワラシ。二十二歳さい。アツレキ三十一年二月七日、表、日本岩手県上閉伊郡かみへい青笹あおざさ村字瀬戸あせ二十一番戸伊藤万太の宅、八畳座敷中に故なくして擅ほしままに出現して万太の長男千太、

八歳を氣絶せしめたる件。」

「よろしい。わかった。」とネネムの裁判長が云いました。

「姓名年齢、その通りに相違ないか。」

「相違ありません。」

「その方はアツレキ三十一年二月七日、伊藤万太方の八畳座敷に故なくして擅に出現したることは、しかとその通りに相違ないか。」

「全く相違ありません。」

「出現後は何を致した。」

「ザシキをザワツザワツと掃いて居りました。」

「何の為に掃いたのだ。」

「風を入れる為です。」

「よろしい。その点は実に公益である。本官に於て大いに同情を呈する。しかしながらすでに妄りに人の居ない座敷の中に出現して、箒の音を発した為に、その音に愕ろいて一寸のぞいて見た子供が氣絶をしたとなれば、これは明らかな出現罪である。依つて今日より七日間当ムムネ市の街路の掃除を命ずる。今後はばけもの世界長の許可なくして、妄りに

向う側に出現することはならん。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」

「実に名断だね。どうも実に今度の長官は偉い。」と判事たちは互たがいにささやき合いました。ザシキワラシはおじぎをしてよろこんで引つ込みました。

次に来たのは鳶とび色と白との粘土で顔をすっかり隈くま取つて、口が耳まで裂さけて、胸や足ははだかで、腰こしに厚い簍みののようなものを巻いたばかりものでした。一人の判事が書類を読みあげました。

「ウウウウエイ。三十五歳。アツレキ三十一年七月一日夜、表、アフリカ、コンゴオの林中の空地に於て故なくして擅ほしいままに出現、舞踏中ぶとうの土地人を恐きょうふ怖散乱せしめたる件。」

「よろしい、わかつた。」とネネムは云いました。

「姓名年齢その通りに相違ないか。」

「へい。その通りです。」

「その方はアツレキ三十一年七月一日夜、アフリカ、コンゴオの林中空地に於て、故なくして擅ほしいままに出現、折おりから柄月明によつて歌舞、歓をなせる所の一群を恐怖散乱せしめたことは、しかとその通りにちがいないか。」

「全くその通りです。」

「よろしい。何の目的で出現したのだ。既に法律上故なく擅となつてあるが、その方の意中を今一応尋ねよう。」

「へい。その実は、あまり面白かつたもんですから。へい。どうも相済みません。あまり面白かつたんで。ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、ケロ。」

「控えろ。」

「へい。全くどうも相済みません。恐れ入りました。」

「うん。お前は、最明らかな出現罪である。依つて明日より二十二日間、ムツセン街道の見まわりを命ずる。今後ばけもの世界長の許可なくして、妄りに向側に出現いたしてはならんぞ。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」そのばけものも引つ込みました。

「実に名断だ。いい判決だね。」とみんなさささやき合いました。その時向うの窓がガタリと開いて

「どうだ、いい裁判長だろう。みんな感心したかい。」と云う声がしました。それはさっきの灰色の一メートルある顔、フウファイバー先生でした。

「ブラボオ。フウファイーボー博士。ブラボオ。」と判事も検事もみんな怒鳴りました。その時はもう博士の顔は消えて窓はガタンとしまりました。

そこでネネムは自分の室へやに帰って白いちぢれ毛のかつらを除とりました。それから寝ねました。

あとはあしたのことです。

### 三、ペンネンネンネン・ネネムの巡視じゅんし

ばけもの世界裁判長になったペンネンネンネン・ネネムは、次の朝六時に起きて、すぐ部下の検事を一人呼びました。

「今日は何時に公判の運びになっているか。」

「本日もやはり晩の七時から二件だけございます。」

「そうか。よろしい。それでは今朝は八時から世界長に挨拶あいさつに出よう。それからすぐ巡視だ。みんなその支度したくをしろ。」

「かしこまりました。」

そこでペンネンネンネン・ネネムは、燕麦<sup>オート</sup>を一把と、豆汁<sup>まめじる</sup>を二リットルで軽く朝飯をすまして、それから三十人の部下をつれて世界長の官邸に行きました。

ばけもの世界長は、もう大広間の正面に座って待っています。世界長は身のたけ百九十尺もある中世代の瑪瑙<sup>めのう</sup>木<sup>ぼく</sup>でした。

ペンネンネンネン・ネネムは、恭々しく進んで片膝<sup>かたひざ</sup>を床につけて頭を下げました。

「ペンネンネンネン・ネネム裁判長はおまえであるか。」

「さようでございます。永久に忠勤<sup>ちかたてまつ</sup>を誓い奉ります。」

「うん。すっかりやって呉<sup>く</sup>れ。ゆうべの裁判のことはもう聞いた。それに今朝はこれから巡視に出るそうだな。」

「はい。恐れ入ります。」

「よろしい。どうかしつかりやって呉<sup>く</sup>れ。」

「かしこまりました。」

そこでペンネンネンネン・ネネムは又うやうやしく世界長に礼をして、後戻<sup>あともとど</sup>りしで退きました。三十人の部下はもう世界長の首尾<sup>だいきげん</sup>がいいので大喜びです。

ペンネンネンネン・ネネムも大機嫌<sup>だいきげん</sup>でそれから町を巡視しはじめました。

ばけもの世界のハンムンムンムン・ムムネ市の盛んなことは、今日とて少しも変りません。億百万のばけものどもは、通り過ぎ通りかかり、行きあい行き過ぎ、発生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行し、それはそれは、実にどうも見事なものです。ネネムもいまさらながら、つくづくと感服いたしました。

その時向うから、トツテントツテントツテントと、チャリネルという楽器を叩いて、小さな赤い旗をたてた車が、ほんの少しずつこつちへやって来ました。見物のばけものがまるで赤山のようにそのまわりについて参ります。

ペンネンネンネン・ネネムは、行きあいながらふと見ますと、その赤い旗には、白くフクジロと染め抜いてあつて、その横にせいの高さ三尺ばかりの、顔がまるでじじいのように皺くちやな殊に鼻が一只ばかりもある怖い子供のようなのが、小さな半ずぼんをはいて立ち、車を引つ張っている黒い硬いばけものから、「フクジロ印」という商標のマッチを、五つばかり受け取っていました。ネネムは何をするのかと思つてもつと見ていますと、そのいやなものはマッチを持ってよちよち歩き出しました。

赤山のようなばけもの見物は、わいわいそれについて行きます。一人の若いばけものが、うしろから押されてちよつとそのいやなものにさわりましたら、そのフクジロという

いやなものほくるりと振り向いて、いきなりピシヤリとその若ばけもの頬ほっぺたを撲なぐりつけました。

それからいやなものは向うの荒物屋あらものに行きました。その荒物屋というのは、ばけもの歯はみがきや、ばけもの楊子ようじや、手拭てぬぐいやずぼん、前掛まえかけなどまで、すべてばけもの用具一式を売っているのです。

フクジロがよちよちはいつて行きますと、荒物屋のおかみさんは、怖こわがって逃にげようと思いました。おかみさんだつて顔がまるで猥ぼくのようで、立派なばけものでしたが、小さくてしわくちやなフクジロを見ては、もうすっかりおびえあがってしまったのです。

「おかみさん。フクジロ・マツチ買つてお呉れ。」

おかみさんはやつと気を落ちつけて云いました。

「いくらですか。ひとつ。」

「十円。」

おかみさんは泣きそうになりました。

「さあ買つてお呉れ。買わなかったら踊おどりをやるぜ。」

「買います、買います。踊の方はいりません。そら、十円。」おかみさんは青くなってブ



ルブルしながら銭函ぜにばこからお金を集めて十円出しました。

「ありがとう。ヘン。」と云いながらそのいやなものは店を出ました。

そして今度は、となりのばけもの酒屋にはいりました。見物はわいわいついて行きます。酒屋のはげ頭のおじいさんばけものも、やっぱりぶるぶるしながら十円出しました。

その隣となりはタン屋という店でしたが、ここでも主人が黄色な顔を緑色にしてふるえながら、十円でマッチ一つ買いました。

「これはいかん。実にけしからん。こう云ういやなものが町の中を勝手に歩くということはおれの恥辱ちじよくだ。いいからひつくくつてしまえ。」とペンネンネンネン・ネネムは部下の検事に命令しました。一人の検事がすぐ進んで行ってタン屋の店から出て来るばかりのそのいやなものをくるくる十重とえばかりにひつくくつてしまいました。ペンネンネンネン・ネネムがみんなを押しおし分けて前に出て云いました。

「こら。その方は自分の顔やかたちのいやなことをいいことにして、一つ一銭のマッチを十円ずつに家ごと押しつけてあるく。悪いやつだ。監獄かんじよくに連れて行くからそう思え。」するとそのいやなものは泣き出しました。

「巡查さん。それはひどいよ。僕はぼくいくらお金を貰もらったって自分で一銭もとりはしないん

だ。みんな親方がしまつてしまふんだよ。許してお呉れ。許してお呉れ。」

ネネムが云いました。

「そうか。するとお前は毎日ただ引つぱり廻まわされて稼かせがせられる丈だけだな。」

「そうだよ、そうだよ。僕を太夫たいふさんだなんて云いながら、ひどい目にばかりあわすんだよ。ご飯さえ碌ろくに呉れないんだよ。早く親方をつかまえてお呉れ。早く、早く。」今度はそのいやなものが俄にわかに元氣を出しました。

そこで

「あの車のとくに居るものを引つくれ。」とネネムが云いました。丁度出て来た巡査が三人ばかり飛んで行つて、車にポカンと腰掛けて居た黒い硬いばけものを、くるくるくるつと縛しばつてしまいました。ネネムはいやなものといいっしよ緒しよにそちへ行きました。

「こら。きさまはこんなかたわなあわれなものをだしにして、一銭のマッチを十円ずつに売っている。さあ監獄へ連れて行くぞ。」

親方が泣き出しそうになつて口早に云いました。

「お役人さん。そいつああんまり無理ですぜ。わしあ一日一いっぴ杯はいあるいてますがやつと喰くうだけしか貰わないんです。あとはみんな親方がとつてしまふんです。」

「ふん、そうか。その親方はどこに居るんだ。」

「あすこに居ます。」

「どれだ。」

「あのまがり角でそらを向いてあくびをしている人です。」

「よし。あいつをしばれ。」まがり角の男は、しばられてびっくりして、口をパクパクやりました。ネネムは二人を連れてそっちへ歩いて行って云いました。

「こらきさまは悪いやつだ。何も文句を云うことはない。監獄にはいれ。」

「これはひどい。一体どうしたのです。ははあ、フクジロもタンイチもしばられたな。その事ならなあに私はただこうやって監督かんとくに云いつかって車ただけを見ている丈でございます。

私は日給三十銭の外に一銭だつて貰もらやしません。」

「ふん。どうも実にいやな事件だ。よし、お前の監督はどこに居るか、云え。」

「向うの電信柱の下で立つたまま居いねむ睡りいねむをしているあの人です。」

「そうか。よろしい。向うの電信ばしらの下のやつを縛しばれ。」巡查や検事がすぐ飛んで行くとうしました。その時ネネムは、ふともつと向うを見ますと、大抵たいてい五間隔おきぐらいに、あくびをしたりうでぐみをしたり、ぼんやり立っているものがまだまだたくさん続いている

ます。そこでネネムが云いました。

「一寸待て。まだ向うにも監督が沢山居るようだ。よろしい。順ぐりにみんなしばって来い。一番おしまいのやつを逃がすなよ。さあ行け。」

十人ばかりの検事と十人ばかりの巡査がふうとけむりのように向うへ走って行きました。見る見る監督どもが、みんなペタペタしばらくられて十五分もたたないうちに三十人というわけものが一列にずうつとつづいてひっぱられて来ました。

「一番おしまいのやつはこいつか。」とネネムが緑色の大へんハイカラなげものをゆびさしました。

「そうです。」みんなは声をそろえて云います。

「よろしい。こら。その方は、あんなあわれなかたわを使って一銭のマツチを十円に売っているとは一体どう云うわけだ。それに三十二人も人を使って、あくまで自分の悪いことをかくそうとは実にけしからん。さあどうだ。」

ところが緑色のハイカラなげものは口を尖<sup>とが</sup>らせて、一向恐れ入りません。

「これはけしからん。私はそんなことをした覚えはない。私は百二十年前にこの方に九円だけ貸しがあるので今はもう五千何円になっている。わしはこの方のあとをつけて歩いて

毎日、日<sup>にっ</sup>プで三十円ずつとる商売なんだ。」と云いながら自分の前のまっ赤なハイカラな  
ばけものを指さしました。

するとその赤色のハイカラが云いました。

「その通りだ。私はこの人に毎日三十円ずつ<sup>はら</sup>払う。払っても払っても元金は殖<sup>ふ</sup>えるばかり  
だ。それはとにかく私は又この前のお方に百四十年前に非常な貸しがあるのでそれをもと  
でに毎日この人について歩いて実は五十円ずつとっているのだ。マッチの罪とかなんとか  
一向私はしらない。」と云いながら自分の前の青い色のハイカラなばけものを指さしまし  
た。すると青いのが云いました。

「その通りだ。わしは毎日五十円ずつ払う。そしてわしはこの前のお方に二百年前かなり  
の貸しがあるのでそれをもとでに毎日ついて歩いて百円ずつとるだけなのだ。」

指されたその前の黄色なハイカラが云いました。

「そうだ。その通りだ。そしてわしはこの前のお方に昔すてきなかしがあるので、毎日つ  
いて歩いて三百円ずつとるのだ。」

「ふうん。大分わかかって来たぞ。あとはもう貸した年と今とる金ただだけを云え。」とネ  
ネムが申しました。

「二百五十年五百円」「三百年、千円」「三百一年、千七円」「三百二年、千八円」「三百三年、千九円」「三百四年、千十円。」

ネネムはすばやく勘定しました。

「もうわかった。第三十番。電信柱の下の立ちねむり。おまえは千三十円とっているだろう。」

「全くさようでございます。ご明察恐れ入ります。」

その時さつきの角のところ立って、あくびをしていた監督が云いました。

「どうです。そうでしょう。私は毎日千三十円三十銭だけとって、千三十円だけこの人に納めるのです。」

ネネムが云いました。

「そうか。すると一体誰がフクジロを使って歩かせているのだ。」

「私にはわかりません。私にはわかりません。」とみんなが一度に云いました。そこでネネムも一寸困こまりましたがしばらくたつてから申しました。

「よし。そんならフクジロのマッチを売っていることを知っているものは手をあげ。」  
硬い黒いタンイチはじめ順ぐりに十人だけ手をあげました。

「よろしい。すると十人目の貴さまが一番悪い。監獄にはいれ。」

「いいえ。どういたしまして。私はただフクジロのマツチを売っていることを遠くから見ているだけでございます。それを十円に売るなんて、めっそうな、私は一向に存じませぬ。」

「どうもこれはずいぶん不愉快な事件だね。よろしい。そんならフクジロがマツチを十円で売るということを知っているものは手をあげ。」

硬い黒いタンイチからだ三人でした。

「するとお前だ。監獄にはいれ。」とネネムが云いました。

「それはさつきも申しあげました。私はただ命令で見ていただけです。」

「するとお前は十円に売ることには知っている、けれどもただ云いつかっているだけだというのだな、それから次のお前は云いつけてはいる。けれども十円に売れなんて云ったおぼえもなし又十円に売っているとも思わない、ただまあ、フクジロがよちよち家を出たりはいつたりして、それでよくこんなにもうかるもんだと思っていたと、こうだろう。」

「全くご名察の通り。」と二人が一緒に云いました。

「よろしい。もうわかった。お前がたに云い渡す。これは順ぐりに悪いことがたまつて来

ているのだ。百年も二百年もの前に貸した金の利息を、そんなハイカラななりをして、毎日ついてあるいてとるといふことは、けしからん。殊ことにそれが三十人も続いているというのは実にいけないことだ。おまえたちはあくびをしたりいねむりをしたりしながら毎日を暮くろして食事の時間だけすぐ近くの料理屋にはいる、それから急いで出て来て前の者がまだあまり遠くへ行っていないのを見てやつと安心するなんという実にどうも不届きだ。それからおれがもうけるんじゃないと云うので、悪いことをぐんぐんやるのもあまりよくない。だからみんな悪い。みんなを罪にしなければならぬ。けれどもそれではあんまりかあいそうだから、どうだ、みんな一ぺんに今の仕事をやめてしまえ。そこでフクジロはおれがどこかの玩具おもちゃの工場の小さな室へやで、ただ一人仕事をして、時々お菓子かしでもたべられるようにしてやろう。あとのものはみんな頑がんじょう丈じょう。そうだから自分で勝手に仕事をさがせ。もしどうしても自分でさがせなかつたらおれの所に相談に來い。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」みんなはフクジロをのこして赤山のような人をわけてちりぢりに逃にげてしまいました。そこでネネムは一人の検事をつけてフクジロを張子はりこの虎とらをこさえる工場へ送りました。

見物人はよろこんで、



「えらい裁判長だ。えらい裁判長だ。」とときの声をあげました。そこでネネムは又巡視またじゆんをはじめました。

それから少し行きますと通りの右側に大きな泥どろでかためた家があつて世界警察長官邸かんでいと看板が出て居りました。

「一寸はいつて見よう。」と云いながらネネムは玄関げんかんに立ちました。その家中が俄にわかにザワザワしてそれから警察長がさきに立つて案内しました。一通り中の設備を見てからネネムは警察長と向い合つて一つのテーブルに座りました。警察長は新聞のくらいある名刺めいしを出してひろげてネネムに恭うやうや々しくよこしました。見ると、

ケンケンケンケンケンケン・クエク警察長

と書いてあります。ネネムは

「はてな、クエクと、どうも聞いたような名だ。一寸突然ですがあなたはこの近在の農家のご出身ですか。」と云いました。

すると警察長はびっくりしたらしく、

「全くと明察の通りです。」と答えました。

「それではあなたは無断で家から逃げたおいでになりましたね。お母さんが大へん泣いて

おいですよ。」とネネムが云いました。

「いや、全く。実は昨晚も電報を打ちましたようなわけで、実はその、逃げたというわけでもありません。丁度一昨昨日の朝、一寸した用事で家から大学の小使室まで参りましたのですが、ついそのフウファイバー博士の講義につり込まれまして昨日まで三日というもの、聴いたり落第したり、考えたりいたしました。昨晚やつと及<sup>きゆうだい</sup>第<sup>だい</sup>いたしました。こちらに赴任<sup>ふにん</sup>いたしました。」

「ハツハツハ。そうですか。それは結構でした。もう電報をおかけでしたか。」

「はい。」

そこでネネムも全く感服してそれから警察長の家を出てそれから又グルグルグルグル巡視をして、おひるごろ、ばけもの世界裁判長の官邸に帰りました。おひるのごちそうは薬<sup>わやく</sup>のオムレツでした。

#### 四、ペンネンネンネンネン・ネネムの安心

ばけもの世界裁判長、ペンネンネンネンネン・ネネムの評判は、今はもう非常なものに

なりました。この世界が、はじめ一疋の**みじんこ**から、だんだん**枝**がついたり、足が出来たりして発達しはじめて以来、こんな名判官は実にはじめてだとみんなが申しました。

シャアロンという**ばけもの**の高利貸でさえ、ああ実にペンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ、ダニーさまの再来だ、いやダニーさまの発達だとほめた位です。

ばけもの世界長からは、毎日一つずつ位をつけて来ましたし、**勳章**を**贈**つてよこしましたので、今はその位を読みあげるだけに二時間かかり、勳章はネネムの室の壁一杯になりました。それですから、何かの儀式でネネムが式辞を読んだりするときは、その位を読むのがつらいので、それをあらかじめ三十に分けて置いて、三十人の部下に一ぺんがやがやと読み上げて貰うようにしていましたが、それでさえやはり四分はかかりました。勳章だつてその通りです。どうしてネネムの胸につけ切れるもんでありませんでしたから、ネネムの大礼服の上着は、胸の**処**から長さ**十米**ばかりの切れがずうと続いて、それに勳章をぞろつとつけて、その帯のようなものを、三十人の部下の人たちがぞろぞろ持つて行くのでした。さてネネムは、この様な大へんな名譽を得て、そのほかに、みなさんももうご存知でしょうが、フウファイーボー博士のほかに、**誰も決して喰べてならない菓**のオムレツまで、ネネムは喰べることを許されていました。それですから、誰が考えてもこんな

幸福なことがない筈はずだったので、実はネネムは一向面白くありませんでした。それと  
いうのは、あのネネムが八つの飢饉ききんの年、お菓子かしの籠かごに入れられて、「おホイホイ、お  
おホイホイ。」と云いながらさらさらって行かれたネネムの妹のマミミのことが、一寸も頭か  
ら離れなかつた為ためです。

そこでネネムは、ある日、テーブルの上の鈴リンをチチンと鳴らして、部下の検事を一人、  
呼びました。

「一寸君にたずねたいことがあるのだが。」

「何でございますか。」

「膝ひざやかかとの骨ほねの、まだ堅かたまらない小さな女の子をつかう商売は、一体どんな商売だろ  
う。」

検事はしばらく考えてから答えました。

「それはばけもの奇術マジックでございましょう。ばけもの奇術師が、よく十二三位までの女の  
子を、変身術だと申して、ええこんどは犬の形、ええ今度は兎うさぎの形などと、ばけものをし  
んこ細工のように延ばしたり円めたり、耳を附つけたり又とったり致いたすのをよく見受けます  
。」

「そうか。そして、そんなやつらは一体世界中に何人位あるのかな。」

「左様。一昨年の調べでは、奇術を職業にしますものは、五十九人となって居りますが、只今は大分減つたかと存ぜられます。」

「そうか。どうもそんなしんこ細工のようなことをするというのは、この世界がまだなめくじでできていたころの遺風だ。一寸視察に出よう。事によると禁止をしなければなるまい。」

そこでネネムは、部下の検事を随したがえて、今日もまちへ出ました。そして検事の案内で、まっすぐに奇術大一座のある処に参りました。奇術は今や丁度まっ最中です。

ネネムは、検事と一緒に中へはいました。楽隊が盛んにやっています。ギラギラする鋼の小手だけつけた青と白との二人のばけものが、電気決闘というものをやっているのです。剣がカチャンカチャンと云うたびに、青い火花が、まるで箒のように剣から出て、二人の顔を物凄く照らし、見物のものはみんなはらはらしていました。

「仲々勇壮だね。」とネネムは云いました。

そのうちにととうとう、一人はバアと音がして肩から胸から腰へかけてすっぽりと斬られて、からだがまっ二つに分れ、バランチャンと床に倒れてしまいました。

斬った方は肩を怒らせて、三べん刀を高くふり廻し、紫色の烈しい火花を揚げて、楽屋へはいつて行きました。

すると倒れた方のまっ二つになつたからだがバタツと又一つになつて、見る見る傷口がすつかりくつき、ゲラゲラゲラツと笑つて起きあがりました。そして頭をほんのすこし下げてお辞儀をして、

「まだ傷口がよくくつきませんから、粗末なおじぎでごめんなさい。」と云いながら、又ゲラゲラゲラツと笑つて、これも楽屋へはいつて行きました。

ボロン、ボロン、ボロロン、とどらが鳴りました。一つの白いきれを掛けた卓子と、椅子とが持ち出されました。眼のまわりをまっ黒に塗つた若いものが、わざと少し口を尖らして、テーブルに座りました。白い前掛をつけたばけものの給仕が、さしわたし四尺ばかりあるまっ白の皿を、恭々しく持つて来て卓子の上に置きました。

「フォーク！」と椅子にかけた若ばけものがテーブルを叩きつけてどなりました。

「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持つて参ります。」と云いながら、その給仕は二尺ばかりあるホークを持つて参りました。

「ナイフ！」と又若ばけものはテーブルを叩いてどなりました。

「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持って参ります。」と云いながらその給仕は、幕のうしろにはいつて行つて、長さ二尺ばかりあるナイフを持って参りました。ところがそのナイフをテーブルの上に置きますと、すぐ刃がくにやんとまがつてしまいました。

「だめだ、こんなもの。」とその椅子にかけたばけものは、ナイフを床に投げつけました。ナイフはひらひらと床に落ちて、パツと赤い火に燃えあがつて消えてしまいました。

「へい。これは無調法致しました。ただ今のはナイフの広告でございました。本物のいいのを持つて参ります。」と云いながら給仕は引つ込んでこ行きました。

するとどうもネネムも検事もだれもかれもみんな愕おどろいてしまったことは、いつの間にか、どうして出て来たのか、すてきに大きな青いばけものがテーブルに置かれた皿の上に、あぐらをかいて、椅子に座つた若ばけものを見おろしてすまし込んでいたのでした。青いばけものは、しずかにみんなの方を向きましました。眼のまわりがまつ赤です。俄にわかに見物がどつと叫さけびました。

「テン・テンテンテン・テジマア！ うまいぞ。」

「ほう、素敵すてきだぞ。テジマア！」

テジマアと呼ばれた皿の上の大きなばけものは、顔をしずかに又廻して、椅子に座ったわかばけものの方を向きました。そして二人はまるで二匹の獅子ししのように、じつとにらみ合いました。見物はもうみんな総立ちです。

「テジマア！ 負けるな。しつかりやれ。」

「しつかりやれ。テジマア！ 負けると食われるぞ。」こんなような大きわぎのあとで、こんどはひっそりとなりました。そのうちに椅子に座った若ばけものは眼めが痛くなったらしく、とうとうまばたきを一つやりました。皿の上のテジマアはじりじりと顔をそつちへ寄せて行きます。若ばけものは又五つばかりつづけてまばたきをして、とうとうたまらなくなつたと見えて、両手で眼を覆おおいました。皿の上のテジマアは落ちついてにゆうと顔を差し出しました。若ばけものは、がたりと椅子から落ちました。テジマアはすつくりと皿の上に立ちあがって、それからひらりと皿をはね下りて、自分が椅子にどっかり座りそれから床の上に倒れている若ばけものを、雑作もなく皿の上につまみ上げました。

その時給仕が、たしかに金かねでできたらしいナイフを持って来て、テーブルの上に置きました。テジマアは一ちよつと寸うなずいて、ポケットから財布さいふを出し、半紙判の紙幣しへいを一枚引っぱり出して給仕にそれを握にぎらせました。



「今度の旦那は気前が実にいいなあ。」とつぶやきながら、ばけもの給仕は幕の中にはいつて行きました。そこでテジマアは、ナイフをとり上げて皿の上のばけものを、もにやもにやもにやつと切つて、ホークに刺して、むにやむにやむにやつと喰つてしまいました。その時「バア」と声がして、その食われた箸の若ばけものが、床の下から躍りだしました。

「君よくたつしやで居て呉れたね。」と云いながら、テジマアはそのわかばけものの手を取つて、五六ぺんぶらぶら振りましました。

「テジマア、テジマア！」

「うまいぞ、テジマア！」みんなはどつとはやしました。

舞台の上の二人は、手を握つたまま、ふいつとおじぎをして、それから、

「バラコック、バララゲ、ボラン、ボラン、ボラン」と変な歌を高く歌いながら、幕の中に引つ込んで行きました。

ボロン、ボロン、ボロロンと、どらが又鳴りました。

舞台が月光のようにさつと青くなりました。それからだんだんのんびりしたいかにも春らしい桃色に変わりました。

まつ黒な着物を着たばけものが右左から十人ばかり大きなシャベルを持ったりきらきらするフォークをかついだりして出て来て

「おキレの角はカンカンカン

ばけもの麦はベランベランベラン

ひばり、チツククチツクチー

フォークのひかりはサンサンサン。」

とばけもの世界の農業の歌を歌いながら畑を耕したり種子を蒔いたりするようなまねをはじめました。たちまち床からベランベランベランと大きな緑色のばけもの麦の木が生え出して見る間に立派な茶色の穂を出し小さな白い花をつけました。舞台は燃えるように赤く光りました。

「おキレの角はケンケンケン

ばけもの麦はザランザラ

とんびトーロロトーロロトー、

鎌のひかりは シンシンシン。」

とみんなは足踏みをして歌いました。たちまち穂は立派な実になって頭をずうつと垂れま

した。黒いきもののばけものどもはいつの間にか大きな鎌を持っていてそれをサクサク刈りはじめました。歌いながら踊りながら刈りました。見る見る麦の束は山のように舞台のまん中に積みあげられました。

「おキレの角はクンクンクン

ばけもの麦はザツク、ザツク、ザ、

からすカーララ、カーララ、カー、

唐箕とうみのうなりはフウララフウ。」

みんなはいつの間にか棒を持っていました。そして麦束はボンボン叩かれたと思うと、もうみんな粒つぶが落ちていました。麦むぎ稈からは青いほのおをあげてめらめらと燃え、あとには黄色な麦粒の小山が残りました。みんなはいつの間にかそれを摺すり白うすにかけていました。大きな唐箕とうみがもう据すえつけられてフウフウフウと廻まわっていました。

舞台が俄かにすきとおるような黄金色きんになりました。立派なひまわりの花がうしろの方にぞろりとならんで光あっています。それから青や紺や黄やいろいろな色いろ硝子ガラスでこしらえた羽虫が波なみになったり渦うず巻まきになったりきらきら飛びめぐりました。

うしろのまつ黒なびろうどの幕が両方にさつと開いて顔の紺色な髪かみの火のようなきれい

な女の子がまっ白なひらひらしたきものに宝石を一杯につけてまるで青や黄色のほのおのように踊って飛び出しました。見物はもうみんなきちがい鯨のような声で

「ケテン！ ケテン！」とどなりました。

女の子は笑ってうなずいてみんなに挨拶を返しながら舞台の前の方へ出て来ました。

黒いばけものはみんなで麦の粒をつかみました。

女の子も五六つぶそれをつまんでみんなの方に投げました。それが落ちて来たときはみんなまっ白な真珠しんじゆに変わっていました。

「さあ、投げ。」と云いながら十人の黒いばけものがみな真似まねをして投げました。バラバラバラ真珠の雨は見物の頭に落ちて来ました。

女の子は笑って何かかすかに呪いまじなのような歌をやりながらみんなを指図しています。

ペンネンネンネンネン・ネネムはその女の子の顔をじっと見ました。たしかにたしかにそれこそは妹のペンネンネンネンネン・マミミだったのです。ネネムはどうとう堪え兼ねて高く叫びました。

「マミミ。マミミ。おれだよ。ネネムだよ。」

女の子はぎよつとしたようにネネムの方を見ました。それから何か叫んだようでしたが

声がかすれてこつちまで届きませんでした。ネネムは又叫びました。

「おれだ。ネネムだ。」

マミミはまるで頭から足から火がついたようにはねあがって舞台から飛び下りようとしていたら、黒い助手のばけものどもが麦をなげるのをやめてばらばら走って来てしつかりと押おえました。

「マミミ。おれだ。ネネムだよ。」ネネムは舞台へはねあがりました。

幕のうしろからさっきのテジマアが黄色なゆるいガウンのようなものを着ていかにも落ち着いて出て参りました。

「さわがしいな。どうしたんだ。はてな。このお方はどうして舞台へおあがりになったのかな。」

ネネムはその顔をじつと見ました。それこそはあの飢饉ききんの年マミミをさらった黒い男でした。

「黙だまれ。忘れたか。おれはあの飢饉の年の森の中の子供だぞ。そしておれは今世界裁判長だぞ。」

「それは大へんよろしい。それだからわしもあの時男の子は強いし大丈夫だいじょうぶだと云つたの

だ。女の子の方は見る。この位立派になっている。もうスタアと云うものになってるぞ。お前も裁判長ならよく裁判して礼をよこせ。」

「しかしお前は何故しんこ細工を興業するか。」

「いや。いやいややや。それは実に野蛮の遺風だ。この世界がまだなめくじでできているところの遺風だ。」

「するとお前の処じやしんこ細工の興業はやらんな。」

「勿論さ。おれのとこのはみんな美学にかなっている。」

「いや。お前は偉い。それではマミミを返して呉れ。」

「いいとも。連れて行きなさい。けれども本人が望みならまた寄越して呉れ。」

「うん。」

どうです。とうとうこんな変なことになりました。これというものもテジマアのばけもの格が高いからです。

とにかくそこでペンネンネンネンネン・ネネムはすっかり安心しました。

## 五、ペンネンネンネンネン・ネネムの出現

ペンネンネンネン・ネネムは独立もしましたし、立身もしましたし、巡視じゆんしもしましたし、すっかり安心もしましたから、だんだんからだも肥ふとり声も大へん重くなりました。大抵の裁判はネネムが出て行って、どしりと椅子いすにすわって物を云おうと一寸唇くちびるをうごかしますと、もうちゃんときまってしまうのでした。

さて、ある日曜日、ペンネンネンネン・ネネムは三十人の部下をつれて、銀色の袍ほろをひるがえしながら丘へ行きました。

クラレという百合ゆりのような花が、まっ白にまぶしく光って、丘にもはざまにもいちめん咲いて居りました。ネネムは草に座って、つくづくとまっ青な空を見あげました。

部下の判事や検事たちが、その両側からぐるっと環わになってならびました。

「どうだい。いい天気じゃないか。

ここへ来て見るとわれわれの世界もずいぶんしずかだね。」ネネムが云いました。

みんなの影法師かげぼうしが草にまっ黒に落ちました。

「ちかごろは噴火ふんかもありませんし、地震じしんもありませんし、どうも空は青い一方ですな。」判事たちの中で一番位の高いまっ赤な、ばけものが云いました。

「そうだね全くそうだ。しかし昨日サンムトリが大分鳴ったそうじゃないか。」

「ええ新報に出て居りました。サンムトリというのはあれですか。」

二番目にえらい判事が向うの青く光る三角な山を指しました。

「うん。そうさ。僕の計算ぼくによると、どうしても近いうちに噴き出さないといかんのだな。何せ、サンムトリの底の瓦斯ガスの圧力が九十億気圧以上になってるんだ。それにサンムトリの一番弱い所は、八十億気圧にしか耐えたない筈はずなんだ。それに噴火をやらんというのはおかしいじゃないか。僕の計算にまちがいがあるとはどうもそう思えんね。」

「ええ。」

上席判事やみんなが一緒いっしょにうなずきました。その時向うのサンムトリの青い光がぐらぐらつとゆれました。それからよこの方へ少しまがつたように見えましたたちまが、忽ち山すが水す瓜いかを割ったようにまっ二つに開き、黄色や褐かつしよく色の煙けむりがぶうつと高く高く噴きあげました。

それから黄金色きんの熔岩ようがんがきらきらきらと流れ出して見る間にずっと扇形おうぎがたにひろがりました。見ていたものは

「ああやったやった。」



とそつちに手を延して高く叫びました。

「やったやった。とうとう噴いた。」

とペンネンネンネン・ネネムはけだかい紺青色にかがやいてしずかに云いました。

その時はじめて地面がぐらぐらぐら、波のようにゆれ

「ガーン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」と耳もやぶれるばかりの音がや  
つて来ました。それから風がどうつと吹いて行つて忽ちサンムトリの煙は向うの方へ曲り  
空はますます青くクラレの花はさんさんとかがやきました。上席判事が云いました。

「裁判長はどうも実に偉い。今や地殻までが裁判長の神聖な裁断に服するのだ。」

二番目の判事が云いました。

「実にペンネンネンネン・ネネム裁判長は超怪である。私はニイチヤの哲学が恐  
らくは裁判長から暗示を受けているものであることを主張する。」

みんなが一度に叫びました。

「ブラボオ、ネネム裁判長。ブラボオ、ネネム裁判長。」

ネネムはしずかに笑つて居りました。その得意な顔はまるで青空よりもかがやき、上等  
の瑠璃よりも冴えました。そればかりでなく、みんなのブラボオの声は高く天地にひびき、

地殻がノンノンノンノンとゆれ、やがてその波がサンムトリに届いたころ、サンムトリがその影えいきよう響きようを受けて火柱高く第二の爆発ばくはつをやりました。

「ガーン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

それから風がどうつと吹いて行って、火山弾や熱い灰やすべてあぶないものがこの立派なネネムの方に落ちて来ないように山の向うの方へ追い払はらったのでした。ネネムはこの時は正によろこびの絶頂でした。とうとう立ちあがって高く歌いました。

「おれは昔は森の中の昆布こんぶ取り、

その昆布網あみが空にひろがったとき

風の中のふかやさめがつきあたり

おれの手がぐらぐらとゆれたのだ。

おれはフウファイヴオ博士の弟子でし

博士はおれの出した筆記帳を

あくびと一しよにスポリと呑みこんだ。

それから博士は窓から飛んで出た。

おれはむかし奇術師のテジマアに

おれの妹をさらわれていた。

その奇術師のテジマアのところで

おれの妹はスタアになっていた。

いまではおれは勲章くんしょうが百ダアス

藁わらのオムレツももうたべあきた。

おれの裁断には地殻すいかも服する

サンムトリさえ西瓜すいかのように割れたのだ。」

さあ三十人の部下の判事と検事はすっかり込み込まれて一緒に立ち上がって、

「ブラボオ、ペンネンネンネンネン・ネネム

ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。」

と叫びながら踊りはじめました。

「ファイガロ、ファイガロト、ファイガロツト。」

クラレの花がきらきら光り、クラレの茎くきがパチンパチンと折れ、みんなの影法師はまるで戦のように乱れて動きまわりました。向うではサンムトリが第三回の爆発をやっています。

「ガアン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

黄金きんの熔岩ようがん、まっ黒なけむり。

「ファイガロ、ファイガロト、ファイガロツト。」

ペンネンネンネンネン・ネネム裁判長

その威いオキレの金角きんかくとならび

まひるクラレの花の丘かみに立ち

遠い青びかりのサンムトリに命令する。

青びかりの三角のサンムトリが

たちまち火柱を空にささげる。

風が来てクラレの花がひかり

ペンネンネンネンネン・ネネムは高く笑う。

ブラボオ。ペンネンネンネン・ネネム

ブラボオ、ペンペンペンペン・ペネム。」

その時サンムトリが丁度第四回の爆発をやりました。

「ガアン、ドロドロドロド、ノンノンノンノン。」

ネネムをはじめばけものの検事も判事もみんな夢中むちゆうになって歌ってはねて踊おどりました。

「フィーガロ、フィガロト、フィガロット。」

風が青ぞらを吼ほえて行けば

そのなごりが地面に下って

クラレの花がさんさんと光り

おれたちの袍ほうはひるがえる。

さつきかけて行つた風が

いまサンムトリに届いたのだ。

そのまっ黒なけむりの柱が

向うの方に倒たおれて行く。

フィーガロ、フィガロト、フィガロット。

ブラボオ、ペンネンネンネンネン・ネネム  
ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。

おれたちの叫び声は地面をゆすり

その波は一分に二十五ノット

サンムトりの熱い岩漿がんしょうにとどいて

とうとうも一度爆発をやった。

ファイガロ、ファイガロト、ファイガロット。

ファイガロ、ファイガロト、ファイガロット。」

ネネムは踊ってあばれてどなって笑ってはせまりました。

その時どうしたはずみか、足が少し悪い方へそれました。

悪い方というのはクラレの花の咲いたちよつとばけもの世界の野原の一ちよつと寸うしろのあたり、う

しろと云うよりは少し前の方でそれは人間の世界なものでした。

「あつ。裁判長がしくじった。」

と誰かたれがけたたましく叫んでいるようでしたが、ネネムはもう頭がカアンと鳴ったまま

つ黒なガツガツした岩の上に立っていました。

すぐ前には本当に夢ゆめのような細い細い路みちが灰色こげの苔こけの中をふらふらと通っているのでした。そらがまつ白でずうつと高く、うしろの方はけわしい坂で、それも間もなくいちめんのまつ白な雲の中に消えていました。

どこにたつた今歌っていたあのぼけもの世界のクラレの花の咲いた野原があつたでしょう。実にそれはネパールの国からチベットへ入る峠とうげの頂たかねだったので。

ネネムのすぐ前に三本の竿さおが立ってその上に細長い紐ひものようなぼろ切れが沢山たくさん結び付けられ、風にパタパタパタパタ鳴っていました。

ネネムはそれを見て思わずぞつとしました。

それこそはたびたび聞いた西蔵チベットの魔除まよけの幡はたなのでした。ネネムは逃にげ出しました。まつ黒なけわしい岩みねの峯みねの上をどこまでもどこまでも逃げました。

ところがすぐ向うから二人の巡礼じゆんれいが細い声で歌を歌いながらやって参ります。ネネムはあわててバタバタバタバタもがきました。何とかして早くぼけもの世界せかいに戻もどろうとしたのです。

巡礼たちは早くもネネムを見つけました。そしてびっくりして地にひれふして何だかわ

けのわからない呪文じゆもんをとえ出ししました。

ネネムはまるでからだがしびれて来ました。そしてだんだん気が遠くなってとうとうガーンと気絶してしまいました。

ガーン。

それからしばらくたってネネムはすぐ耳のところで

「裁判長。裁判長。しつかりなさい、裁判長。」という声を聞きました。おどろいて眼を明いて見るとそこはさつきのコラレの野原でした。

三十人の部下たちがまわりに集まって実に心配そうにしています。

「ああ僕はどうしたんだろう。」

「只ただいま今空から落ちておいででございました。ご気分はいかがですか。」

上席判事が尋ねました。

「ああ、ありがとう。もうどうもない。しかしとうとう僕は出現してしまった。

僕は今日は自分を裁判しなければならぬ。

ああ僕は辞職しよう。それからあしたから百日、ばけものの大学校の掃除そうじをしよう。ああ、何もかにもおしまいだ。」



ネネムは思わず泣きました。三十人の部下も一緒に大声で泣きました。その声はノンノンノンと地面に波をたて、それが向うのサンムトリに届いたころサンムトリが赤い火柱をあげて第五回の爆発をやりました。

「ガアン、ドロドロドロドロ。」

風がどつと吹いて折れたクラレの花がプルプルとゆれました。〔以下原稿なし〕



## 青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第九巻 童話」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

※□内は、底本の注記です。

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2010年2月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記

## 宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>